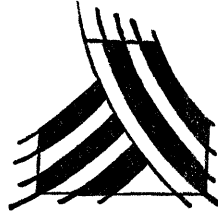


活人と殺人



原口愚常

人をいかす者はいかされ、人を殺す者は殺される。こう書いたあとで、どうも聖書に似たような言い方があったような気がしてきた。しかし、生来のものぐさに加えて、聖書にあってもなくても、ここでは関係がないと不遜を決めこむ。最近、残念なことであるが、この自明の理とも思えることを知らない人が増えたような気がする。

かつてある会で、「活人と殺人」ということは卒業生に送った。そして、「他人をいかす」ことはとりもなおさず自分をかすことであり、そのためにはどのようしたらよいかということ、舌足らずに、しかし、熱を込めて説いた。この機会に、もう少し別な観点から人をいかすにはどのようにしたらよいかを考えてみたい。この問題は、人を殺さないためにはどう

したらよいか、と言い替えてもほぼ同じである。殺さないことはいかすことに通じるからである。人をいかすとか殺すという場合、文字通りの意味で使われるほかに、比喩的な意味で用いられることもある。「人殺し」というと文字通りの意味だけであるが「人を殺す」というと両方の意味になる。「人をいかす」というのを比喩的に使う場合は「活かす」と書く。その心は、「人のよいところや優れたところを引き出した、伸ばしたりする」ことである。「人を殺す」というのは、この逆である。

この点を踏まえた上で、当初の問題に戻ろう。人をいかす上で特に重要なのは「愛情と真心と智恵」の三つとことばである。もつと言えば、「真の愛情と智恵と真心に裏打ちされたことば」である、ということになろう。これに眼力・胆力・気力・行動力等々の力が備われば申し分なし、ということであるが、ここでは、この点につい

ては立ち入らない。

ことばというものは、実に不思議なもので、大きな力をもっている。わずかに五十程の字でもって、人を殺すこと、いかすこととを筆頭に、あることもないことも、目に見えることも見えないことも、さらには目にあまることすら表すことができる。字の数ではなく、音の数ということになると、日本語では母音が五で子音が十五強であるから、計二十強の音があれば、ほぼ、無限に近いことがらを表現できる、と言つてよい。これは実に驚くべきことである。

ただし、ことばだけでは十分でないことも確かである。真の智慧と愛情と真心が欠けると、ことばは生氣を失い、魅力を失うだけでなく、遂には死んでしまうからである。われわれの身のまわりには、このような実例にことかくことはない。

ことばをみがき・いかすことは、自分をみがき・いかすことである。と同時に、人

をもいかすことにつながる。「しつけ」というのは、「ことばのしつけ」であると言われるのは、このことと無関係ではありえない。ただ、注意すべきことは、ことばをみがくだけで、実行力とか他のものを養わない場合には、「口舌の徒」になり下がるということである。これでは、ことばはみがいても、それもいかすことにはならない。

いきたことばということであれば、その例は数多い。が、ここでは一つだけ、山岡莊八(73年)『徳川家康2』から引いてみよう。場面は、捕われの身となった竹千代(のちの家康)を救おうとして、母親の於大が若き信長の袖にすがるために、信長を訪ねたところである。

「お許は熊屋敷でこの信長をだましたな」

於大が入ってゆくと、信長はいきさつよりも先に言つて、脇息を股の間に抱えこんで頼杖をついた。それから近侍に、

「みなは下れ」と乱暴に命じた。

「お許は熊の若宮が身内でのうて、水野下野が妹御、以前の松平広忠が室ではないか」

「恐れ入りました」

と、於大は言つた。よく光る眼であったが、切れ長なその眼の奥に滴る情愛の色の濃さが頼りであつた。

「その節は、波太郎さまご座興と存じましたれば、そのままにいたしました」

「座興か……」と信長は、十四の若者とは思へぬ深さで微笑した。

「人生すべてこれ座興かも知れぬ。ところでお許はこんどわしに何を土産に持つて参つた？」

「はい。母のこころ……それ一つでござりまする」

「よし、きれい！」

いきなりパツと片手をひらいて突きつけられて……於大は、膝のり出した。必死だった。良人にかくして、この人にすがると、よりほか、竹千代を救う道はあり、そうに思えない。

「差上げます。お受取りを……」

じつとすが、眼をしてみ、つめてゆく。於大の、双眼は見る間に涙でいっぱいになつていった。「差上げます。母のこころ……母のこころ」

はげしい鳴咽がこみあげた。肩が波打ち、声

が、もつれ、やがて涙は音をたてて畳におちた。
十四歳の信長は、とつぜん大きく笑いだした。
「もううた。もううた。お許の土産をたしかに
もううた。もうよい。」

於大はしずかに頭を垂れて、またしばらく動
かなかつた。
(傍点は原口)

この部分(特に傍点を付したところ)を
読むたびに、不思議な感動が胸に迫って
くる。母親の真の愛情と真心とことばの相乗
効果に心を打たれるのである。これは、こ
とばが生きている証拠である。

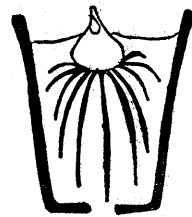
いつの日か、このような人の心を打つ、
生きたことばが使えるようになりたい。こ
れが私の数年来の願いであるが、まだかな
えられそうにもない。

(はらぐち・くじょう「本名は庄輔」筑波
大学)

冬の息

いきものは皆、息をしています。それ
を強く感じさせられるのは冬のおかげで
す。生まれて四、五回目の冬を迎える子供
達は、一年を大人よりずっと長く過ごして
いるらしく、いつも新しい気持ちで移り来
る季節を迎えているようです。

自分のはいた息が白いゆげとなつてロヤ



豊田一秀

鼻から出てくるようになると、子供はそれ
が何ともおかしく、不思議でそして嬉しく
て仕方がないのです。

白い息、それはいきものが生きてきて
いることを象徴的に表わしているように私
には思えます。蒸気機関車に根強い人気が
あるのは、きっとその力強い音とともに上